



「いろいろな事情を抱えている人が、仕事で自信や居場所を取り戻すことが大事」と話すYPP社長の五味渕紀子さん=東京都中央区



夫に「子供がない今、やつてみたいひん?」と飲食店の開業を提案。退職し、準備を始めた。12年に「Boku no Shokudo」をオープン。2年続けた治療をやめた3カ月後に妊娠が分かった。長女(3歳)と長男(2歳)が誕生。子育てと仕事を両立する。

「Boku no Shokudo」の名で、15年に「すき焼き専科」(下京区)、昨年は「肉寿司専科」(中京区、錦市場)

千穂大経営学部教授の川名和美さんは、出産や子育て、家族の介護など、生活とのバランスを考慮した起業を「ワークライフバランス起業」と名付けた。

交流のあった滋賀大経営学部の弘中史子教授(写真)は、「川名さんは女性起業家を応援し、ワーク



世の中への影響大きく

時間に在宅で働きたい」と願う人たちをつなぐ。

短時間の仕事で自信を付け、「卒業」する人もいる。障害のある男性で、YPPで週3日、1日2時間の仕事から始め、経験を積み、他社に週30時間の勤務で採用された例がある。

五味渕さんが起業したのは05

由を尋ねたところ、上位は「自己実現」57・3%、「ワーク・ライフ・バランス」18・8%、「自己雇用の必要性」9・0%だった。弘中教授は「起業し、さらに人を雇うことでの自分が働けない時に、会社が回り、女性が女性を助ける良い循環もできる。一歩進んだ形だ。一つ一つは小さい企業だが、世の中に与える影響は大きい」と話す。

ワーク・ライフ・バランスの先達 女性起業家

政府が働き方改革を進め、企業の取り組みも注目されている。独自のアイデアで、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活との両立)を実現する女性起業家たちもいる。彼女たちの起業への思いを追った。

【御園生枝里、写真も】

雇いと助け合いの好循環

人気のステーキ丼(1080円)は、中村さんの夫で取締役の剛之さん(46)が趣味で考案した。「夫の作る料理の中で一番おいしい。食べ出したら止まらない」。赤ワインとじょうゆベースのソースがおいしさの決め手だ。

起業のきっかけはステーキ丼のおいしさと、不妊だったという。中村さんは学校法人で広報を務め、全国出張など多忙な日々を過ごしていた。11年に会社員の剛之さんと結婚。夫婦で「定年退職したらカフェをやりたい」と夢を描いていた。

不妊治療を始めたが、妊娠しないといった。

1日100食限定の「国産牛ステーキ丼専門店「Boku no Shokudo」(京都市右京区)を経営する「minitts」社長の中村朱美さん(33)は、100食限定の理由を「長時間労働をなくしたかった。『100食』という終わりが見える飲食店は、働く人にもお客様にも分かりやすい」と話す。「Boku」の

人偏には「みんなが幸せに」との思いを込めた。

東京都中央区)では、中小企業から経理などの事務を受注し、仕事をマニュアル化するなど分かりやすく整理して、登録メンバーに依頼する。事務に手の回らない企業と、育児や介護などがあるため「短

2月19日現在で、登録メンバーは728人。イタリア、中国、タイ在住もいる。社員は9人(正社員4人)。

特徴はメンバーのチーム制。子供や介護する親の突然の病気、自身の体調悪化など、仕事が遅れそうな時には助け合う。また、社員やメンバーがインターネット通話で仕事内容を教えるなど、サポートがあり、初めてでも安心して働ける。

先に起業した新聞社時代の先輩を訪ねると、事務がたまっていた。経理や書類整理を任せられ、「助かりの社長は事務の負担が大きく、通常業務に専念できない。経理なら子育て中のお母さんとワークシエアできる」と発想が浮かんだ。

紹介で仕事が増え、事務経験の

●限定期間で働きやすく

2014年に全国放送のテレビ番組で紹介され、翌日、行列ができるほどになり、店で整理券を配り、来店時間をお約束するようにした。

すき焼き専科は韓国のサイトで1位になり、7割が外国人客で、他の2店も1割を占める。

目標にしていた百貨店での「肉寿司」の販売が今春から始まる。5月からは近畿経済産業局の女性起業家応援プロジェクトで夢を応援する側も担う。

2月19日現在で、登録メンバーは728人。イタリア、中国、タイ在住もいる。社員は9人(正社員4人)。

特徴はメンバーのチーム制。子

供や介護する親の突然の病気、自身の体調悪化など、仕事が遅れそうな時には助け合う。また、社員やメンバーがインターネット通話で仕事内容を教えるなど、サポートがあり、初めてでも安心して働ける。

先に起業した新聞社時代の先輩

を訪ねると、事務がたまっていた。

経理や書類整理を任せられ、「助

かりの社長は事務の負担が大き

く、通常業務に専念できない。経理な

ら子育て中のお母さんとワークシ

エアできる」と発想が浮かんだ。

紹介で仕事が増え、事務経験の

ある子育て中の女性をパート社員として雇った。細々と始め、事務

代行に絞って4年目で黒字経営

に。売り上げは伸び続けていると

いう。

弘中教授は「起業し、さらに人

を雇うことでの自分が働けない時

に、会社が回り、女性が女性を助

ける良い循環もできる。一歩進ん

だ形だ。一つ一つは小さい企業だ

が、世の中に与える影響は大きい